

世紀をわたる中国現代詩展望

佐々木 久 春

中国の現代詩は、文化大革命以後わずか四半世紀に過ぎないが、変化は大きい。1980年代の朦朧詩、1990年代にかけての第三代詩、21世紀へ向かっての多様化の時代と詩作・詩論は次々と展開している。

2002年7月、西安において「地球」主催の第8回アジア詩人会議が開催された。その会には中国を代表する現代詩人・詩論家が、多数参加した。その発表は、現代中国の詩および詩論を代表する発表であった。

最初に、蘭州大学教授、唐欣の論を紹介する。

(1) 中国西部の詩

中国の西部は広大な大地であり、国土の大半を占め、アジアの心臓の地帯と称される。その地形は世界の屋根・チベット高原（青蔵高原）から太平洋に向かって傾斜していて、海洋以外の殆どあらゆる地質形態を含んで、気候は烈しく変化が多い。ここは、民族の混血、宗教の融合の地であり、中華民族を育てる二つの有名な大河・揚子江と黄河がこの地に源を発していて、悠久の歴史、燦爛たる文化と貧窮の現状をあわせ持つ地域である。このような複雑な背景の下に中国西部の詩人達は自己の詩作を開始するのである。西部地域が実際上千差万別であるのと同様に、詩人達自身にどのような共通性があるかというのもたいそう難しい事である。もし強いていくつかの特徴を探し出すとすれば、こう言えるだろう。遠い地方の省にいて、遠く政治の中心から離れ、詩人達はおそらく自由自在の民間生活をより身近なものとし、多分に原始的で野性的な空気を帯びていて、奔放不羈な想像力と言説の衝動を容易に激発させる事ができる。これはおそらく、詩歌が伸びるために有益であろうと思われ、中国西部の詩人達がこの風土の恩恵を無駄にせず、ひたすら中国の詩歌に溢れる生命力とインスピレーションと想像力を送り込んできたのである

この地区を南から北へ概観してみよう。

陽光燦爛として、四季春のごとき昆明、ここには于堅が住んでいる。彼は中国現代詩史の重要な部分を支え、そして私たちの大詩人についての考え方に重大な修正をなした。彼の故郷への謳歌は彼の詩筆が描く高山大河と同様に、大気はみなぎり充ち、波濤は沸きかえり泥沙ともに流れ、原型と相整合する第二の自然を造り出す。同時に、彼は詩歌を我々の生存の場に回帰させ、莊嚴と樂趣を日常生活にとりもどす。これは形而上学に対する中国伝統の革命的変革以上のものがある。于堅は中国の文化資源の主張、唱導を、彼の詩で行っている。彼は自己の成熟した詩学を打ち立てた、おそらく非常に早い時期に打ち立てた、ごく少数の人の一人である。

西部の北は肥沃な享樂の息吹に満ちた成都の平原である。かつて四川詩人の盛んさを形容して、このような誇張した言い方があった——石を投げれば詩人の頭にぶつかる、と。つまり司馬相如や蘇東坡のような豪華な文学上の人物の出現を言っている。「非々主義」詩人、楊黎、何小竹や、退廃的な柏樺、怪しい癖のある鐘鳴ら、まるで中国語の詩的な潜在的性質の追求に夢中で、みな口について出る即興の表現にすぐれているのである。彼らの詩には、人を驚かせる効果があり、

四川料理の特別な味にも似ている。彼らが、詩歌と言語が互いに触発し得るという事を発見したのは、中国語の詩歌の前途を保証した事でもある。

秦嶺を越えて、私たちはかつて漢・唐の輝かしい古都の証であった西安に到る。ここには確かに多くの詩歌の暗号が隠されていて、当然のことながらそれらは真正の詩人を呼び覚ますのに必要なものである。過去十余年のうちに詩人伊沙は、我らのこの悲劇的宿命の時代に、一種の喜劇的精神を導入し、現代詩に、一種の想像もつかない鋭利さ、スピード、爆発力を注ぎ込んで、初め孤独の挑戦だったのを、今では多くの追随者のいる青年運動に変えてしまった。そして伊沙は、最近の創作長詩『唐』は、古典詩の嶺峰に対する現代からの検証である。道連れの友達のようなゆったりした雰囲気の中かで、心底から悦服してもいれば、からかって冗談を言ってもいるようで、この種の対話の中で私たちは長く続いている伝統を切実に感じる事ができ、過去の高度なものを飛び越える事ができないでもないというように、強く感じるのである。

西へずっと行き続ければ、甘肅省、西海省、新疆そして西藏である。二年前に亡くなった昌耀は、ある意味で西部の詩人の象徴である。彼は、自然、人文地理を自己の詩と織り交ぜ溶け込ませる苦難に満ちた努力をした代表的な人である。西部特有の神話古跡、大沙漠と強い風、あるいはその海拔の高さがもたらす酸欠の状態、それらすべては、あたかも高原のイメージ、極度に興奮した幻覚、激情の人格、を形成するものようである。事実これは巨大な隊列であって確かに多くの人々の、西部の詩歌への定評と期待である。

西部の女流詩人は紹介するに値するもので、確かに彼女らは並はずれている。20年前、翟永明は幽暗神秘の感性と潜在意識の層に深く入って、鋭敏で不思議な麗しい詩句は人々の耳目を一新させ、あとに続く女流の詩作における多くの可能性を開いた。また、妙語天成の小安、高熱譎妄の海男、なよなよとしてセクシーな賈薇、婉然としてあでやかな娜夜らはみな、作品中にみずみずしい柔軟さ、朦朧性、靈妙な動きを、比較的乾燥した中国の詩に与え、硬質な中国詩に柔らかさを提供している。

その外、私の知るところ、西部でしずかに詩作し卓越して特色ある詩人としては秦巴子、李岩、馬非、朱劍などの人がいる。彼等はそれぞれ違った角度で探索し、みな現代詩のハーモニーを豊富にしている。

以上が、私個人の限られた閲読の中での一般的な印象で、これは何ら権威有る定説ではない。私が漏らしたその他の人々を補って私の誤りを正してくだされば、私も許しを求める事がなくなるだろう。

次に、詩人・詩論家で広州出版社編集長・楊克の論を紹介する。楊氏は毎年『中国新詩年鑑』の編集を手がけているだけに、視野が極めて広い。ただし、楊氏と前掲、唐欣氏の論中の地域は、南部において一部重なる。

(2) 中国南方の詩

南方の詩というのは、全くの地理的な概念ではなくて、ある種の現代中国詩の質を示している。市井の生活と関連し、個人と関連し、具体的な事物と関連し、肉体や感官と関連し、人の気質の細部に関連し、そして今まさに変化の発生する世界に関連している。

それは、現代中国の精神を描写するものであり、生存の様相と魂の様相との二重の様相が現れる。地域の面から述べていこう。中国の南方は生産あるいは生存の条件の上で、北方のような厳しさが無い。気候は温暖から灼熱であり、雨水はあふれ、万物すくすくと成長し、人々の屋外の活動

がより多く、気性が比較的穏やかで、事に当たりどちらかというとな解放的な寛容な態度である。市井の生活と商業活動は、国の政治の中心地から遠いこともあって、体制は比較的ゆるやかであり、民間生活の形態はある程度の高さを保って、それがずっと続いている。人々の精神、気質は北方と明らかに区別があり、この面では人々の生活状態から言語の状態に至るまで、より緩やかである。それ故、総じて言うなら北方の詩人の創作は思想におもむきやすく、国家、民族、政治といった類の重い話題に向かうが、南方の詩人はより直感に頼り、より日常生活そのものに関心があり、より自分の関係する事物に関心を注ぎ、より具体的な細部の現象に注意して生活の虚妄感やユートピア式のものとは比較的少ない。20年来の中国社会の形態的变化は、まず南方に発生したものであり、市場意識の多様さが言語方式の多元化を生み出し、大きな統一的な構造や様式は崩壊してしまい、その種の盲目的な追及や個人と日常生活にかかわりない広大な叙事は瓦解に遭遇して、文学のより多くの表現は、存在の私人化を理解するためのものとなった。

荒涼・悲壮と溫柔・多情、力強い響き・豪放さと柔らかな言葉・ひそやかな情、表現の急迫にして公的な性格とやる瀬なく私的な性格等々は、おそらく北方と南方の相違点であろう。おそらく“口号”（スローガン）から“口語”へと知らぬ間に変わってきたのであろうか。

話し言葉の高揚は、中国詩歌をより新鮮で活発なものにして、詩歌に“諧”（滑稽さ）の基本的要素を回復し、嘲笑、諷諭、自嘲の遊戯精神を再び注入しただけでなく、詩歌の語感や口調も語義と同じく重要であることを明らかにした。「どう言うか」は「何を言うか」と同じく重要であり、ある場合、前者はより重要である。南方の話し言葉は基本的には方言である。北方語も方言であるが、北方方言は大体共通語になっていて、その上中国の現代公用語は北方語が基礎となっている。「共通語」での創作は極めて容易に統一的な国家権力の話し言葉の態勢に左右されるが、南方の話し言葉における意識形態の傾向は比較的それが弱く、語感が柔らかく肉感的なぬくもりがあって、「鋼鉄のような」硬質な力感とは違って、詩歌の言葉ではいっそう自由活発で、より人間的で、表現がより自然である。「口語の創作」は「毛語体」と「新中華体」への反動であり、何十年来俳優の朗読を通して聴衆に与えられてきたいわゆる詩歌に対するものである。――すなわちその種の抑揚、休止の古くさく俗っぽい調子――への反発である。

南方は地表の湿り気が多く、植物が繁茂し、民族は北方よりはるかに多様なので、昔から神秘的な土地で、巫術が盛行し、宗教は複雑で、豊富な民謡の資源を有している。これらすべて、南方の詩歌の言語に対する影響は巨大である。20世紀の80年代に早くも、「第三代詩人」の中で雲南、四川、広西の多くの詩人達の詩は、地域的な特徴があった。今に至るまで「70年代後期の一代人」の中で、四川の発星と貴州の夢亦非は、少数民族の生活と言語を背景として巫術的な神秘性豊かな長詩を創作した。南方の詩歌の、人間生存に対する楔の打ち込み、存在（生活、生存）と虚構（修辞）の発見、は詩の存在感を強めた。人の秘められた欲望を表現する身体的創作および叙述性、演劇の情景等々の要素の導入は、作品内容を寛大で全てを包括するものとした。真の自らの性情をより多くさらけ出し、現代人の複雑な情感をより深く伝達し、人の精神世界をより完全に表すようにもなり、それ故疑いなく詩歌をより強健なものにし、より活力激しいものに変えた。80年代中期の『彼ら』『非々』『海上』、および今日まで活躍している『面影』『詩と人間』『自転車』『詩の江湖』等、民間の刊行物は、一貫して南方の詩歌の精神を継承伝達している。その間、詩歌は「型の転換」を生み出すまでには至らず、ただ詩歌の本来の姿に戻ったに過ぎない。

詩歌精神の同一性の消失は、詩歌を支離滅裂にしてしまい、我々はまずこのような変化を認めなければならない。主導が無くて、非主流が多いということは、中国詩歌の進歩であるだけでな

く、時代の進歩でもある。美学観は、芸術上の優れた作品を作ると同時に、低級な模倣の贋作を派生することは避けることができず、真正の積極的な成果はなお幾年かを要してようやく現れるものであろう。しかしある程度、詩人はこの種のものに反抗すべきでもある——すなわち南方の詩歌はある種の神性を回復する能力を備えるべきである。何故なら全く瑣末にこだわって、芸術の高い岸を水浸しにしてしまうからである。

もともと詩歌は、一人の大きな頭を持った侏儒かも知れないし、現在身体強健で堂々たる体格だが心は成長が待たれるものかも知れない。つまりすべては、私の南方の詩歌に対する期待なのである。

(3) 詩作品

次に上記の詩論中にも紹介された人々を含んで、詩人会議で紹介された実作を列記する。

于堅 (Yu Jian) 1954年、昆明生、近年ノーベル賞候補に挙げられていると言われる。

伊沙 (Yi Sha) 1966年、成都生 ノーベル賞候補に挙げたと言われる。

沈奇 (Shen Qi) 1951年、陝西勉県生 台湾でも名が知られている。

楊克 (Yang Ke) 1956年、広州生 広い分野で活躍している。

長い旅で

于 堅

長い旅で

私はいつもともし火を見る
岡や荒野に現れ
時にそれらは閃いては過ぎて行く
時には私たちにずっとついてくる
愛情こもる眼ざしのように
林をつき抜け池を跳び越し
不意に 岡の彼方に現れる
これら黄色い小さな星は
真っ暗な大地を
しっとりと暖め 身近なものにする
私はほんとに車を停めてほしくなり
星たちに向かって突進する
私は信ずる どの一灯も
私の命運を変え得ることを
この後 私の人生は
別の風景である
私はこれらのともし火をただ眺める
眺めるが ともし火は暗黒の大地を
閃いては過ぎ 閃いては過ぎて行く

おし黙って 我らの車は疾駆する
黒洞々たる車内
人は私の傍らで熟睡する

風光無眼

伊 沙

かかあは不在
髭のカールは
鶯毛のペンを投げ捨て
燕尾服を脱いで
厨房に滑り込んだ
ジャガイモをむい
ている女中を
床に押し付け
荒々しく息を切らす
これは言えるだろうか
ある階級が
圧迫する
もう一つの階級を などと

あの山 あの人 あの犬

沈 奇

あの山は——彼に
ずっと想いを寄せさせる
彼のあの犬でさえ
うっとりとの山を見て
日々痩せていく

あの山は実はなにもない

伝説もない
古跡もない
名前さえない

林の中の人はみなこんな風に言う
だがやはり彼はあの山を想う

毎日見ているが行ったことはない
彼にそりが合わないよう感じさせる

とりとめなく感じさせる
つらいと感じさせる

彼は終に耐えられなくなった
ある朝早く犬を連れてでかけた
でかけてから 二度と消息はない
林の中の人もうに彼を忘れてしまった
もう 今後あんな狂人や悪霊のついた犬なんて
いないだろうと 村の人は言っている

けれどもあの山には
できたのだった
ひとつの伝説が

野生動物園

楊 克

どれほど大きい檻もまた檻である
この模範監獄は
最も偉大な権利を保有する・囚人散歩の
その時
サーカスのオールスターは
歌い 踊る

象の時間と蟻の時間は
一律に遵う 彼らの天帝
人類の時間に
彼らのどの一本の歯にも
みな盗聴器が取り付けられている
お尻の禿げた老いたサルは
一日中彼の生殖器をぶらつかせる
その自由は
パンツをはいてないに過ぎないのだ

獣性おおいに発する東北トラは
ぶるぶる震える小さな雄鶏に飛びかかって行く
——彼の朝食だ
森林の王のマスクの下で 駆りたてられる奴隷は
まるで格闘士のように

衆人の喝采の中で演技する
過ぎし日を思い起こし、森の深みで
現在の悲しみも混合する

管理人は生物たちのために教えた
貨幣をなくしたり叢林の中で食物を探すという長所を
彼は得意満面 彼の領民に告げる
これが金無くて食物探す天国なのだと

かつてオウム返しに
いま居る人間社会が監獄で獣の生きる道は無いと抗議した
彼の長いため息は
その日トンビに穴を開けられ禁止された

脱獄に成功した黒ヒョウは
街の小路を逃げ回り
住んでいた木の洞を探せないで
車輪の下で惨死した
こういう人でいっぱいな病んだ世界では
どんな庇護の場所もない
牢獄の安全さに比べれば

(4) 結語

以上、21世紀に入って間もないが、最新の中国現代の詩論と詩を紹介した。中国の国土は広大であるが、その中の西方と南方の詩論と詩作品である。広大なだけに、現在の政治的中心地から離れている。しかしそれが、彼らの自信をなんら損なうことは無い。むしろその特徴を作品に生かそうとして入る。

稿を改めて、中国北方の詩と詩論を取り上げたい。

(注) 引用の詩論および詩作品は、すべて筆者が翻訳した。